

渋沢栄一(1840-1931)は 1840 年に現在の埼玉県深谷市で生まれた。栄一は若い頃から家族農場とインディゴの染料事業を通しビジネスを学んだ。栄一は従兄弟の尾高惇忠(1830-1901)の指導の下で中国の古典を研究した。それは会社利益よりも社会福祉を重視するという彼の生涯の原則を育んだ。この期間、徳川幕府の軍事政権は権力を維持しようと奮闘し、栄一は京都での奉仕を強いられる。1867 年、栄一はパリ万国博覧会の代表団の一員として、フランスやヨーロッパ諸国で 1 年半を過ごし、西洋社会や経済を視察した。帰国後、栄一は培った知識を活かし日本初となる株式会社「商法会所」を設立した。この頃、徳川幕府は崩壊し、明治政府が権力を握っていた。栄一は在野の一員だったが、明治政府は渋沢の財界の知恵を重視し財務省に任命した。官僚としての彼の最後の仕事の 1 つは富岡製糸場の開発を監督することであった。富岡の近くで育った栄一は、蚕とその地域の知識を十分に身に付けていた。1873 年に政府を離れたが、それは栄一のキャリアの始まりでもあった。第一国立銀行を設立し、金融機関を中心とした 500 社以上の企業経営に役立った。ビジネスで成功しただけでなく、600 以上の慈善団体に関わる慈善家として有名であった。栄一は 91 歳で亡くなるまで、社会福祉プログラムを推進し続けた。渋沢は日本の近代的な企業・金融システムの発展に不可欠な役割を果たし、「日本資本主義の父」と呼ばれている。